『NHK年鑑』で振り返る放送の歴史⑤
～10年ごとのテレビ放送の歴史特集～

メディア研究部　広川　裕

はじめに

2023年2月，日本でテレビ放送が始まってから70年を迎えた。史料としての『NHK年鑑』（以下，『年鑑』）に着目して放送の歴史を振り返る本シリーズ。今回は，テレビ放送開始から10年ごとの節目で『年鑑』が何を記載し，そこから何が読み取れるかを見ていくことにしたい。クローズアップするのは，テレビ放送の歴史やその折々のテレビを巡るさまざまな動きについてまとめた特集である。

『年鑑1963』10周年　受信契約数への注目

日本でテレビ放送が始まったのは1953年2月1日，それから10年が経過した『年鑑1963』では，「テレビ10年の歩み」として2ページの特集を掲載している。ここでは「総合テレビ」「教育テレビ」「カラーテレビ」「テレビ技術」の4項目に分けて，その歴史を簡単に振り返っている。

そこからわかるのは，テレビ放送受信契約者数の驚異的な増加である。テレビ放送開始時にはわずか866件だったテレビ受信契約者数が，1962年度末には1,337万9,000件に増大し，世帯普及率では全世帯の約3分の2にテレビが普及した（世帯当たり普及率64.8%）。

この原因として，特にNHKのテレビ放送網の拡充が大きく影響している。1962年度末までにテレビ局の開局が進み，総合テレビは全国の84%が受信可能に，教育テレビは全国の77%が受信可能になり，全国の広範囲にわたってテレビ受信が可能になった。

この特集ではテレビがお茶の間に飛躍的に普及する様子が具体的に読み解ける。

『年鑑1973』20周年　カラー化を中心にした記述

テレビ放送が始まって20年が経過した『年鑑1973』では，「20周年を迎えたテレビジョン放送と受信者の普及」として約3ページの特集を掲載している。ここでは「カラー放送時代の出現」「テレビ受信者の普及」の2項目について触れている。

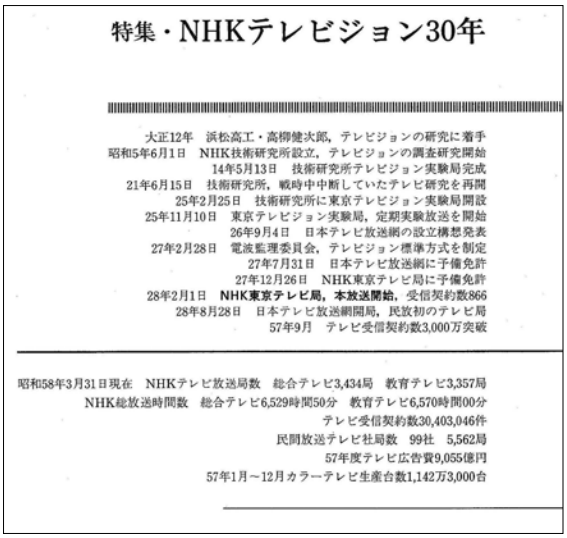
「カラー放送時代の出現」では，テレビより約30年早く始まり放送を先導してきたラジオによる時代から“テレビ時代”へ，さらに“カラー放送時代”の段階を実現したと記載。特筆すべきこととして，1971年10月に総合テレビが全面カラー化を達成，受信契約においても1971年度末にはカラー契約数が白黒の普通契約数を上回ったことを挙げている。さらに1972年末の衆議院議員総選挙で，新しく政見・経歴放送が全面カラー化されたことを記載している。

この特集記事では，テレビが白黒からカラーへという新しい時代を迎えたことを華々しく伝えていることが読み解ける。

『年鑑1983』30周年　データ中心型の特集

テレビ放送が始まって30年が経過した『年鑑1983』では，「特集・NHKテレビジョン30年」と題して，44ページにわたる特集を掲載している。

冒頭のページには1923年にテレビ研究が始まってから，1953年2月1日にNHKがテレビ放送を開始，1982年9月にテレビ受信契約数が



特集・NHKテレビジョン30年

大正12年　浜松高工・高柳健次郎，テレビジョンの研究に着手
昭和5年6月1日　NHK技術研究所設立，テレビジョンの調査研究開始
14年5月13日　技術研究所テレビジョン実験局完成
21年6月15日　技術研究所，戦時中中断していたテレビ研究を再開
25年2月25日　技術研究所に東京テレビジョン実験局開設
25年11月10日　東京テレビジョン実験局，定期実験放送を開始
26年9月4日　日本テレビ放送網の設立構想発表
27年2月28日　電波監理委員会，テレビジョン標準方式を制定
27年7月31日　日本テレビ放送網に予備免許
27年12月26日　NHK東京テレビ局に予備免許
28年2月1日　**NHK東京テレビ局，本放送開始**，受信契約数866
28年8月28日　日本テレビ放送網開局，民放初のテレビ局
57年9月　テレビ受信契約数3,000万突破

昭和58年3月31日現在　NHKテレビ放送局数　総合テレビ3,434局　教育テレビ3,357局
NHK総放送時間数　総合テレビ6,529時間50分　教育テレビ6,570時間00分
テレビ受信契約数30,403,046件
民間放送テレビ社局数　99社　5,562局
57年度テレビ広告費9,055億円
57年1月～12月カラーテレビ生産台数1,142万3,000台

「特集・NHK テレビジョン 30 年」冒頭
『年鑑 1983』

3,000万を突破するまでのテレビジョンの小史を掲載している。

特集は，「統計・テレビジョン30年」（10ページ），「テレビジョン年表」（7ページ），視聴率関連（6ページ），「NHKテレビ・番組と技術の記録から」（20ページ）の4つの柱からなる。その特徴はさまざまなデータで30年を振り返るものだ。

このうち，「統計・テレビジョン30年」で紹介されている統計の数は実に26に及ぶ。そのうち，1952年度から1982年度（一部暦年あり）の30年にわたる統計の中に，「NHK衛星中継実施回数・時間数（1968年～）」がある。統計開始の1968年には総時間数が51時間37分だったのが，1982年には660時間41分と13倍近く増加している。また，「国民総生産および媒体別広告費」の媒体別広告費では，1953年から新聞が1位を継続していたが，1975年にテレビが新聞を抜いて1位となったことがわかる。

「テレビジョン年表」では，「NHKテレビ」「民間放送テレビ」「放送行政（テレビ関連）」の3つの項目を掲載している。

視聴率関連では，「視聴率ベスト15」で，1955年から1982年まで，毎年NHKが実施した関東（1960年までは京浜）の視聴率調査をもとに，高視聴率番組ベスト15を掲載。「主要事件・事象とテレビ世帯視聴率」では，1964年から1983年までの主要事件・事象とテレビ世帯視聴率を，ビデオリサーチ社のデータをもとに掲載している。

「NHKテレビ・番組と技術の記録から」は「芸術祭受賞一覧」「国際コンクール受賞一覧」「長寿番組一覧」「大河ドラマ一覧」「連続テレビ小説一覧」「テレビカメラの変遷」「録画機の変遷」などを掲載している。

「特集・NHKテレビジョン30年」の特徴は，データのみで，解説が付与されていないことである。民放を含め，さまざまなデータを紹介することでテレビ放送開始30年を振り返ることに徹している。いわばデータ中心型の特集で，テレビ30年の動向がデータから読み解ける。

『年鑑1993』40周年　データ中心型が続く

テレビ放送が始まって40年が経過した『年鑑1993』では，「特集・テレビ40年」として20ページにわたる特集を掲載している。

記事のスタイルは「特集・NHKテレビジョン30年」に類似している。冒頭には「テレビジョン小史」を掲載している。

続いて，1983年以降の10年の出来事である「“多チャンネル”へのあゆみ」を最初に紹介し，その後は「NHKテレビ受信契約数：3,400万世帯に普及」「民間放送テレビ社局数：すすむ多局化」と，「特集・NHKテレビジョン30年」の構成を継承しつつ，タイトルに副題をつけてデータに対する解説を付与している。

特集・テレビ40年

●テレビジョン小史●

1920年代，ラジオの実用化が始まったころ，研究者の目はすでにテレビに向けられていた。
1925年３月，日本のラジオ放送始まる。同年，浜松高工教授・高柳健次郎，**ブラウン管に〈イ〉の字**を映し出す。
1930年，NHKが技術研究所を開設，高柳健次郎を招いてテレビ研究に着手。
1936年８月，ドイツがベルリンオリンピックでテレビ実況中継を行った。
1939年４月，米NBC，テレビ定時放送を開始。　同年５月，技術研究所のテレビ実験局が完成。
1940年４月，日本初のテレビドラマ『夕鶴前』を実験放送。この年に予定されていた東京オリンピックは幻に終わったが，テレビ中継実施の体制は整っていた。
1941年，戦争のためテレビ研究は中断，敗戦後も占領軍によって，約１年，テレビ研究は禁止された。
1946年６月，技術研究所でテレビ研究を再開。
1950年２月，技術研究所の東京テレビ実験局を開設。　同年11月，定時実験放送が始まった。
1951年９月，初の民放ラジオ局が開局。放送界はNHK・民放並立の体制に入った。
1953年２月１日，NHK東京テレビジョン局開局。“テレビの時代”が始まった。
1953年８月28日，民放テレビのトップを切って**日本テレビ放送網開局。**街頭テレビに黒山の人。
1955年４月，ラジオ東京テレビ開局。　同年４月，NHK『私の秘密』放送開始。
神武景気に入り，電化による生活革新が進み始めた。　1956年４月，米アンペックス社，VTR開発。
1957年11月，NHK『日本の素顔』放送開始。　1958年10月，KRT『私は貝になりたい』放送。
テレビは“電気紙芝居”の域を脱して独自の映像文化を築き始めた。一方，低俗番組批判も根強かった。
1959年１月10日，NHK東京教育テレビジョン局開局。
1959年２月，日本教育テレビ（NET）開局。　同年３月，フジテレビジョン開局。
1959年４月10日，**皇太子ご結婚式。**“ミッチーブーム”でテレビの普及は大いに加速された。
1960年９月10日，カラーテレビ本放送へ。安保紛争も終わり，高度経済成長の時代が始まろうとしていた。
1962年３月，テレビ受信契約数1,000万突破。
1963年１月，フジテレビ系『鉄腕アトム』放送開始。　同年４月，NHK大型時代劇『花の生涯』放送開始。
1963年11月23日，初の日米間テレビ衛星中継実験でケネディ暗殺の第一報。このころからベトナムの戦火も拡大。
1964年４月，NET『木島則夫モーニングショー』放送開始。朝の時間帯を開拓した。
1964年10月，**東京オリンピック。**この大会は，テレビオリンピックとまで言われた。
1967年10月，民放テレビ局の１局複数局化が可能となる。
1969年７月，アポロ11号打ち上げ。人類の月面第一歩もテレビが全世界に生中継した。
1970年３月，日本万国博開会。　1971年11月，カラー受信契約数1,000万突破。
1972年２月，浅間山荘事件。衛星の10時間現場中継が行われた。　同年５月，沖縄復帰でテレビ調印式。
1973年10月，第１次石油ショック。日本経済は高度成長から安定成長へ移行する。
1973年11月，NET，東京12チャンネルが総合番組局になる。
1974年４月，NHK『ニュースセンター９時』放送開始。夜のニュースに新機軸。
1975年１月，カラー受信契約数2,000万突破。　同年９月，天皇・皇后訪米，各社ENG，衛星中継を活用。
1976年４月，NHK『NHK特集』放送開始。　1977年11月，家庭用1/2インチVTRが月産10万台を突破。
1978年９月，日本テレビ，テレビ音声多重放送実用化試験局運用開始。10月NHKはかも開始。
1979年１月，NHK，南極から生中継。　1980年６月，米CNN放送開始。
1982年９月，**テレビ受信契約数3,000万突破。**
1983年４月，NHK連続テレビ小説『おしん』始まる。全国に大ブームを巻き起こした。
1984年１月，実用放送衛星BS-2a打ち上げ。　同年５月，**NHK衛星試験放送開始。**テレビに新しい波。
1985年10月，テレビ朝日系『ニュースステーション』放送開始。　1985年11月，ハイブリッド方式の文字放送開始。
1986年１月，郵政省が民放テレビを各地域最低４チャンネルとするとの目標を設定。多局化へ道。
1986年12月，NHK衛星試験放送，２チャンネルに拡充。
1987年７月，NHK衛星放送，新サービス開始。衛星第１テレビは24時間独自編成を行う。
1989年１月７日，昭和天皇崩御。年号は平成と改まった。
1989年６月１日，NHK衛星放送が本放送に移行。**ハイビジョン定時実験放送**も開始。
1989年６月，放送法・電波法一部改正。通信衛星CSによる放送サービス実現へ。
1989年11月，ベルリンの壁崩壊。国境を越える電波が“東”の世界を変えた。　1991年１月，湾岸戦争起こる。
1991年４月，日本衛星放送JSBが有料放送を開始。
1991年８月，BS-3b打ち上げ。　同年11月25日，ハイビジョン推進協会のハイビジョン試験放送が始まった。
1992年４月，CSテレビ２社がサービス放送を開始。５月に本放送へ。
“バブル”景気のはじけるなか，本格的な多メディア・多チャンネル時代の到来が告げられた。

「特集・テレビ40年」冒頭　テレビジョン小史
『年鑑1993』

「“多チャンネル”へのあゆみ」では，1984年の衛星試験放送開始や，1989年のハイビジョン定時実験放送開始についても触れている。

「特集・テレビ40年」も基本的にはデータの紹介が中心で，分析や解説はあまり付与されていない。1983年以後の10年間を追記していることが特徴であるが，そのデータの中身をよく見ると，テレビの多チャンネルへの歩みを読み解くことができる。

『年鑑2003』50周年記念事業に焦点を当てた特集

テレビ放送が始まって50年が経過した『年鑑2003』では，「特集 テレビ放送50年」として14ページの特集記事を掲載している。

「『テレビ新時代』事業」「2月はテレビの誕生月」「テレビ50年記念事業」「もう一度見たい番組リクエスト」「その他の取り組み」「広報」「視聴者とテレビ」「NHKアーカイブスのオープン」「NHK放送博物館のリニューアル」という9つの項目で，30周年・40周年とは違い，2003年度のさまざまな話題について特集を構成していることがわかる。

最初に，テレビ放送開始50周年を機に展開した「『テレビ新時代』事業」を紹介している。メインテーマは「子どもたちにすばらしい未来を」。50年間に蓄積した力とデジタルという新しい技術を生かした事業である。ねらいは4つ。①デジタル放送の普及に貢献（南極からのハイビジョン生中継など），②NHKの存在意義を視聴者に明確に伝える（「教育」「環境」など），③地域におけるNHKの存在感をさらに高める，④視聴者とNHKとの関係をより密接にして営業活動にも役立てる（「あなたとともにNHK」を多角的に発信）。

「2月はテレビの誕生月」では，2003年2月1日の特集番組を紹介。この日，総合テレビとハイビジョンで16時間の生放送『あなたとともに50年 今日はテレビの誕生日』（8:00 ～ 24:00ニュース，連続テレビ小説などで一部中断）を放送。「あの人に会いたい」コーナーでは，「もう一度見たいあの番組」に寄せられた視聴者のお便りを紹介。視聴者とともに歩んだ50年を前面に押し出すとともに，懐かしい番組映像を数多く放送した。

「特集 テレビ放送50年」は，放送史のみならず，テレビ50年を記念して放送した番組や，さまざまな事象について紹介しているのが特徴である。また，2003年12月には，三大都市圏

での地上デジタル放送開始とBSデジタル放送3周年を迎えることや，ハイビジョン放送の推進など，「テレビ新時代」のデジタル化への移行を読み解くことができる。

『年鑑2013』60周年 テレビの過去を振り返り，未来を展望

テレビ放送を開始して60年が経過した『年鑑2013』では「特集 テレビ放送60年」として22ページの特集記事を掲載している。

「Ⅰ．特集にあたって」「Ⅱ．テレビ60年に合わせた取り組み」「Ⅲ．未来に向けて」の3つの項目で構成している。

最初の「Ⅰ．特集にあたって」では，60年の歩みの要約と「1. 図表・テレビ放送60年の歩み」(「地上放送事業者数の推移」「受信料収入・媒体別広告費の推移」など)，「2. 視聴率の推移」(「大河ドラマ，連続テレビ小説，紅白歌合戦」「全局高世帯視聴率番組50」)，「3. 基礎データ」(「NHKテレビ局数」「NHK総合テレビ1日当たり放送時間」「NHK受信料収入」など)のデータを掲載している。

そして，「Ⅱ．テレビ60年に合わせた取り組み」では，

1. テレビ60年関連番組
2. NHKアーカイブスの取り組み
3. デジタル展開
4. NHKオンデマンドの取り組み
5. 広報プロモーション展開
6. テレビ60年関連イベント
7. テレビ60年調査

の7つの項目ごとに整理し掲載している。ここでは，特に2と3が新たな取り組みとしてクローズアップされている。

さらに，「Ⅲ．未来に向けて」では，

1. ハイブリッドキャスト
2. スーパーハイビジョン
3. 放送文化アーカイブ構想
4. 番組eテキストシステムの構築

について記載している。ここでは特に，1と2については，2013年時点でのテレビの将来像が見えるようで興味深い。

「特集 テレビ放送60年」は，テレビ60年を振り返るデータの掲載に加えて，この年のさまざまなイベント，さらには将来に向けた展望も記載している。そこからインターネットなどの普及で，テレビ視聴が多様化してきたことが読み解ける。

まとめ

テレビ放送開始10年から，10年ごとに『年鑑』の特集を読み解いてきた。最初の20年はデータやトピックスも少なく2～3ページで収まっていたが，30年からは情報量も増え，データ中心でページ数も増えた。50年にはテレビ50年を記念した番組や事象を紹介し，60年にはテレビ60年を振り返るデータの掲載に加え，テレビ60年関連番組やイベント，将来への展望を記載している。この変化は，「歌は世につれ，世は歌につれ」のように，単に『年鑑』の編集方針だけではなく，おそらく「テレビ」自体の変化が『年鑑』の編集方針にも影響を与えた可能性がある。

『年鑑2023』ではテレビ放送70周年の特集記事を予定している。インターネット時代における「テレビ」というメディアのあり方が問い直されている中で，テレビの歴史をどうまとめるかが課題となりそうである。

（ひろかわ ゆう）